

よる誘導唾液分泌反応を用量依存的に抑制した。Phenylephrine (5 mg/kg, s. c.) による唾液分泌反応に対しては CLZ の低用量では促進作用を示し、高用量では抑制作用を示した。Isoproterenol (0.4 mg/kg, s. c.) による唾液分泌反応に対しては CLZ の影響は認められなかった。

以上の結果は CLZ が副交感神経性唾液分泌反応に対しては抑制作用を示し、交感神経性唾液分泌反応に対しては、CLZ の用量に依存して興奮と抑制の二相性作用を引き起こすことを示している。したがって、CLZ の自律神経系に対するこのような異なった作用態度は、臨床において観察される本剤の相反する唾液分泌の発現と関連性を有することが推測される。

特別講演

ネットワークエチケットについて

岩本 正敏

東北学院大学工学部

電子メールは今や電話、FAX と肩を並べる通信手段として学術研究活動に広く利用されるようになってきた。また、WWW (World Wide Web)、電子会議、ネットフォン、ネットラジオ等とインターネット上でのサービスはマルチメディア化した新たな利用に期待が集まっている。インターネットの参加組織も多様化し、利用者も若年層から高齢者までと広がりを見せている。利用の拡大と同時にその利用の仕方が問題となってくる。

アタッカーによるコンピュータの不正な利用や情報の漏洩、破壊等の被害も報告されている。これに対しては、ネットワークの防火壁や情報の暗号化等、技術的な対応で多くの場合は防ぐ事ができるが、守る側と攻める側の争いに終わりはないであろう。ところで、今問題になりつつあるのは、コンテンツの問題である。WWW で公開されているコンテンツには青少年に害があるものも存在するとして、市民グループが有害ホームページのリストを作成しそれを公開する活動を行い、家庭で、学校で安心して利用できるインターネット環境の整備に努めている。

情報発信への法的な規制に関しては、インターネットには国境はなく規制が難しいのが現状であろう。規制にだけ頼るのではなく、個々の利用者の情報倫理の確立が求められる。地球的規模のインターネットは、時間、距離空間の制約を取り除き個人の活動範囲を拡大した。このことは狭い小さな空間に人類を押し込めた効果もあると考える。個の活動が短期間に世界的に影響を与えるであろう。今、インターネットに良き活動を定着させることが大切であると考えられる。それは大地に種を蒔き育てることに似ている。次世代の種が大地に落ちることを願いながら活動を続けることが大切であろう。インターネットのように可能性のある素敵な環境をどのように使えば人類の生活の質の向上につながるのか、いま我々の知恵が試されている。